

## 『ヒメギフチョウを南雲の里まで』

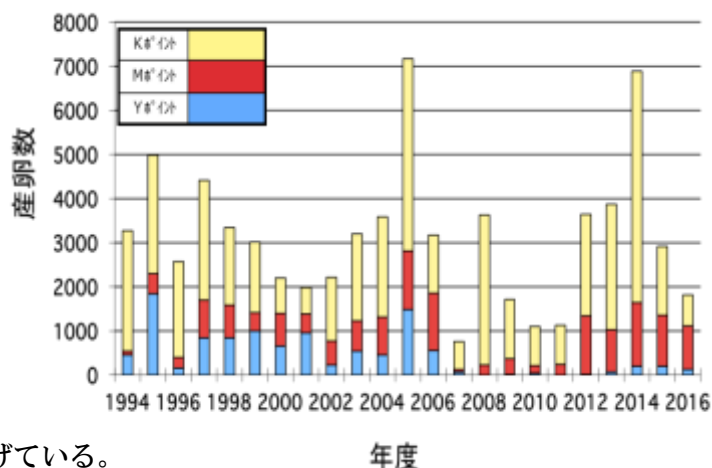
角田 尚士（ヒメギフチョウ保護連絡協議会会長）

「キーワード」環境保全・食草増殖・渡り廊下

〈はじめに〉

赤城山西麓・渋川市赤城町（旧敷島村）で、ヒメギフチョウが発見されたのは、今から76年前、1940（昭和15）年に、当時理科の教師であった田中恒司先生によって発見された。

その後戦争・台風で山は大荒れになり、戦後復興で山は杉・檜・唐松の針葉樹が植林され、山麓のチョウは絶滅し、山腹に植樹された針葉樹林で分断され、山頂付近で辛うじて生きのびた、僅かの個体が細々と現在まで命を繋げている。



〈群馬県指定天然記念物〉

戦後昆虫採集ブームにより、1967（昭和42）年頃には、山麓に僅かに残っていた個体が絶滅し姿を消した。1981（昭和56）年再び生存が確認された。

乱獲からこのチョウを守るため、1986（昭和61）年に群馬県は天然記念物に指定し保護をはじめた。 「指定昭和61年 3月 7日 県告示 第7号」

〈行政・研究者・地域団体による保護活動〉

生息地から下方、山腹には手入れがされていない針葉樹林があり、樹林内には倒木も多く山が荒れている。当然樹下に日光は入らず植物の発生は見られない。

市当局により、生息域拡大のための間伐・下草刈りにより、元の生息地に近い環境に還元すべく、徐々にすすめている。

この間伐をうまく利用して、山頂から山麓への「渡り廊下」を作り、現在山頂付近に集中しているチョウの分散化をはかる。



手入れしない杉・檜・唐松樹林



間伐で明るくなった山林

「赤城姫を愛する集まり」は県指定以来、ヒメギフチョウの保護・産卵調査・幼虫調査観察を28年余も続けている。長年の産卵・幼虫調査データの積み重ねから、的

確な判断指示により、何度かのチョウの絶滅危機を乗り越えている。



産卵調査全山中のサイシンの葉裏を  
数千枚 捲って調査する



多少の雨や霧でも 5. 6. 7月 は 20 日以上  
調査に山へ入る

南雲地区の有志会員は、いつも生育地の下草刈りに汗を流す。



地元有志の下草刈り



キレイになった生育地



児童はドングリの苗移植

地域の小学校で保護活動教育(総合学習の時間)を行っている。



津久田小 4 年生



南雲小 全校児童登山



南雲小 4 年生幼虫観察

食草 ウスバサイシン(薄葉細辛)の増殖への取り組み。

試行錯誤しながらもようやく5年にして、種取り・播種・成長して、本年畑に定植  
できた。山への移植にはこれから4年はかかりそうだ。(H27.5.18 5,940粒 播種)



ウスバサイシンの花に袋掛け



播種4年後の成長した株



4年後でようやく定植